
桜色の彼方

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色の彼方

【Nコード】

N6993M

【作者名】

帆立レノン

【あらすじ】

ヒトとアヤカシが共存する世界……本来有り得ない矛盾を孕んだ世界……

神代真理とその妹深理は、叔父の死を機に故郷である臨神島へと帰郷する。真理は自らの出生を知る為に、白羽木一春とその妹桜花に出会う。

自らの秘密……両親……散らない桜……戻らない過去……記憶……

罪と罰……償い……忌むべき力……真理^{しんり}……

全ては桜咲く彼方へ

散らないサクラ

前夜「月無の夜」

「全く……また、か……無料報酬と言うのが更に憂鬱だな……
徹夜は肌の大敵だと言うのに……」

月の無い夜。外灯も無く、辺りは暗闇。そんな場所にその女は佇んでいた。白と赤を基準とした典型的な巫女服を纏う黒髪の美女。腰には一降りの刀。

『お姉ちゃん……ソレ巫女の台詞じゃないと思う……』

そんな美女を非難するような声が響く。周りには女以外に居ない。「いいではないか。神に仕えているといえど人間だ。愚痴くらい赦せ。まあ……愚痴を言っても仕方あるまい……」

『……はあ』

おおよそ巫女とは思えない発言に声は呆れた声を出す。

「……むっ」

『……っ！来ます！』

前方に気配が沸く。現れたのは巨大な蛇。暗闇よりも暗い黒蛇。そんな異形のモノを前にしても女の余裕は崩れない。

「白蛇……無害な筈の妖　アヤカシ　が何故？」

白い筈の蛇は黒く染まっていた。黒い憎悪を感じさせる気を纏っていた。

「黒い妖気……」

『や、やめて下さい！私達は貴方を抜いたくありません！殺したくありません！』

『……！』

黒蛇が鎌首を擡げ襲い掛かる。女は後に跳び躲す。

「……致し方あるまい……」

腰の刀に手を伸ばす。

『お姉ちゃん！？　で、でも』

「やらねばこちらが殺れるぞ……………それにこうなって仕舞えば終わりだ。既に被害も出ている……………被ってやった方が救いだ」

『……………はい』

「なるべく楽に被ってやりたい……………力を貸してくれ」

『はい！』

腰から刀を抜く。美しい銀の刀身が露になった。その刀身は淡い桜色を放っていた。

「……………」

そのあまりの美しさに黒蛇の動きが止まる。魔さえ見蕩れる程その刀は美しかった。

「今宵もまた美しいな……………行くぞ……………」

女の姿がづれる。

一瞬。まさに一秒に満たない刹那の時間で、黒蛇の背後に立っていた。

「……………」

ずるり、と黒蛇の首がズレた。黒蛇の頭が地面に落ちると同時に黒蛇の軀も消滅した。黒蛇は自分が消滅した事すら気付く事なかった。

「ふう……………」

「あの…お疲れ様です。お姉ちゃん」

いつの間にか、女の側に青色を基準とした巫女服の少女が立っていた。

「いや、たいした労力ではないよ……………」

驚く事は無く、まるでそれが当然のように接する。

「しかし……………現実として、増えてきているな。妖の凶暴化、黒い妖気……………頭の痛い話だ」

「……………そうですね…早く原因を突き止めないと……………」

先程の事を思い出したのか暗い表情を浮かべる少女。

「……気持ちは分かるが……あまり気を負う必要はないぞ。調査は明日からしよう……疲れただろう？ 帰ったらお菓子でも食べよう」

「わぁ……いいですね！」

「まぁ……夜食は太るかも知れんが……」

「あ……あう……」

夜風が吹く。6月の涼風は心地が良い。長らく吹かなかった風が吹いた。

「……彼方より……何かが？」

「……？ どうしたんですか？ お姉ちゃん」

「いや……何でもない」

彼方より出でし者。その運命を反し者。物語はこれより始まる。

第一話「帰郷」

深い蒼い色の海。水平線が何処までも広がっている。船の甲板に16〜17歳くらい少年。神代真理は立っていた。しんと書きまことと読む。変わった名前とよく言われるし、自覚もしている。

中性的で整った顔立ちだが少し目つきが鋭い。だが表情は柔らかく優しい印象を受ける。それなりの恰好をすれば二枚目に入りそうだが、シンプルな恰好のせいか平凡な印象を受ける。この船旅は言わば真理の里帰りだ。と言ってもあまり良いモノでも無い。

「……臨神島か……」

そこが真理の故郷の名らしい。らしいと言うのは、そこで暮らしていたのは、ほんの数年程度だ。両親の事故で死別し、その時のショックで、島に関する記憶を無くしてしまったそうだ。その後本島の叔父に預けられた。

そこで、本当の子のように育てられた。厳しかったけど、叔父は優しくかった。

（って言っても深理限定だけだな……）

そう言いつつも叔父を尊敬していたのも事実だ。

そして、この帰郷のきっかけは、その叔父の死、歳と病だった。

「……………ん？」

たったたと近付く足音。こっちに凄い勢いで走ってくる小柄な女の子。

「……………な？」

「マコトオ　！！」

「ごぶうっ！？」

女の子の頭が真理の腹部を貫いた。一瞬呼吸が止まり、身体中に鈍痛が走る。せりあがってくる熱い何かを必死に飲み込む。

「！！ごぶっ！ごほっげほっ」

「マコトこんなトコに居たんだあ！ミコト探したんだよ！」

「ごほっ！深理！お、お前なあ！」

真理にフライングヘッドバット、もとい抱きついてきた少女　神代深理は真理の妹だ。深い理と書きみことと読む。長い髪を更に二つに結っている。真理より二つ下だが、大きな瞳と髪型で快活そうで見かけより幼い印象を受ける。

先程の突撃も悪気がある訳ではないのだけど。

「何も鳩尾を狙わなくてもいいだろ！」

ピンポイントで、人体急所を打ち抜かれた方は堪らない。

「えへへーゴメンねっマコト！」

ニンマリと100%笑顔。邪気の無い笑顔で許せてしまう自分が情けない。

「ったく……………ところで何か用なのか？」

「ん〜とね……………今日からミコト達住むトコ。どんなトコなんだろうねっ」

「ああ……………何でもジジイの話しではヒトとアヤカシが共生する島らしいな」

叔父の遺言によると、

『臨神島を訪ねると良い。そこに真実がある』

文面はそれだけとその島の地図と住所だった。それと一つの手紙。それはその住所の者に渡せと書いてあった。他に贈る言葉はないのか？と真理は思ったが、ジジイらしいと苦笑いを浮かべた。

そしてアヤカシとは古よりヒトと同じ時を生きる隣人。妖怪と言ふ別名を持つ。種は様々で、中にはヒトと変わらぬ外見を持つ者も居る。

「ヒトとアヤカシが？……珍しいんだね」

驚いた表情をする深理。当然と言えば当然だ。本来ヒトとアヤカシは交わらない。ヒトはアヤカシの能力を恐れ、アヤカシは醜いヒトの心を恐れる。

だが真理は、

「そうか？俺は普通だと思うぞ。昔からの仲間なんだ。仲良くするのは悪い事じゃないだろ？」

「……マコトは怖くないの？アヤカシはフツとは違うんだよ？」

アヤカシには様々な特殊な能力がある火を造り出す者。水を操る者。ヒトに化ける者。ヒトを喰らう者も別に珍しくもない。

「いや？怖いと思った事はない。だってヒトにも色々いるしアヤカシにも色々いる。それと変わらないと思うぞ俺は」

全くアヤカシの能力が怖くないと言えば確かに嘘になる。だが同じように武器を持った悪人も怖い。存在だけで畏怖するのは間違いだ。そう本気で彼は思ってる。

「のーテンキだね」マコトは

「うるさいな……深理はどうなんだ？」

興味本位に真理は聞いてみる。

「ミコトは……怖い……」

そう言う深理の声は少し震えているような気がした。底抜けに明るいこの少女にとってはかなり珍しい事だ。

「マコトと違うのが……怖い……」

「……深理？」

怯えとは違う……もつと深い何か……思わず心配そうに声をかける真理。

「うつん！何でもない！ほら食堂で朝ご飯食べよ！」

「あ、ああ……」

何事も無かったように、深理は船室の食堂へと走り出した。

「あつ。おいっ走るな！」

「えへへっ先に行ってるね！」

あつという間に見えなくなる。

「全く……」

さっきのは気のせいだったのだろうか。

「深く考えても仕方ないか……」

深理が待つ食堂室に足を運ぶことにした。

数時間。もうじき到着をするという事を知らせる船内放送が流れる。

「見に行こつマコト！」

「ああ……」

デッキに行くと、涼しげな風が吹いた。

「……あれが臨神島……」

「キレイ……だね」

緑に囲まれた神秘的な島だった。言葉では顯し辛い何かを感じる不思議な島だった。

そして数分後、荷物を持ち島へ降り立つ。その瞬間

「……！」

ふわりと……何かに包み込まれるような感覚。温かい柔らかな羽にでも包まれたような……そんな不思議な感覚……懐かしい……感覚……

懐かしい？……そんな訳がない……記憶なんてないのに……俺はこの島を覚えてる？

「マコトお　？」

「！」

深理の心配そうな声で真理は目を醒ます。

「……大丈夫……だ」

「ホントホント？嘘はダメだよ

？」

「ちよつとばーとしたただけだ。気にするな」

安心させるように、そんな返答をする真理。

「……マコトがそう言うなら……」

少し深理は納得してはいなさそうだが、ひとまずは安心したらしい。

「ところで、着いたは良いが……深刻な問題これからどうするかな」

既に日は落ちかけている。夜になるのも時間の問題だ。

「マコト決めてないの？」

「結構……勢いで来たからな」

遺産相続とか、家は誰のモノかとか……そう言うのが面倒で逃げたようなモノだ。荷物も最低限の物しかない。

「……誰かの家に泊めてもらうか……最悪……野宿かもな。悪いな深理……」

女の子である深理にとってはそれは辛いだろう。

「いいよ！ミコトはつ。マコトと一緒にならそれでいいの！」

それが真理に気を使ってではなく、本心と解る故に、

（余計そんな事にはならないようにしないとな）

荷物から地図とメモを取り出す

「とりあえず……ここに書いてある住所に行ってみるか」

あてもなくさ迷うよりはマシだろう。

「うん！ああ～早くご飯食べたいなあ～」

「お前な……昼あれだけ食っただろ……」

二人は並んで歩き出す。

それにしても、真理は思う。

（さっきのあの感覚は一体……）

懐かしさを感じた奇妙な感覚。本当にこの島は不思議だ。

「……………ここか…」

「わぁ……………長い階段…」

書いてある住所を目指して着いたのが、古めかしい石造りの階段。ひっそりとした森に続いている。所々が苔や草に覆われ、年季を感じさせる。

「登るか……………」

「うんっ。それじゃどっちが先に着くか競争ねっ」

「あ？」

「よいスタート！」

深理が凄い勢いで石段を登りだした。

「あっ！……………前にもこんな事が……………ああくそっ。途中でへばっても知らないぞ！」

真理は少しだけ早く石段を登り始めた。

「……………どっち行っただんだ…あの馬鹿は…」

しばらく登り続けて真理を待っていたのは分かれ道。

「……………右にするか」

カンだが右を選んだ。

しばらく登ると、

「……………ん？」

何か見えてきた。紅い門のようなソレは、

「鳥居……………神社か？」

古いが、きつちりと整備されている。鳥居をくぐり境内へ。

「……………」

決して大きくはないが立派な神社がそこにはあった。境内にはゴミ一つ落ちていない。

「やぁ」

「！？」

いきなり声をかけられ、慌てて振り向く真理。いつの間にかそこには女が佇んでいた。

巫女服で、18〜20歳くらいの美女だった。流れるような夜を思わす黒髪に、豊満な胸、黄金比のような整った顔立ち。それだけでなく、彼女の纏う優雅な雰囲気。男であれば誰もが見惚れてしまうであろう美女だった。だが真理はそれ以上に、彼女が腰に吊り下げたある物がとても気になっていた。

「おっとすまない……驚かせてしまったようだな」

「……あ、ああ。いやこつちこそ……えっと」

「私はこの白羽木神社24代目神主 白羽木一春だ。よろしく……少年、君は？見たところただの参拝客ではあるまい？」

やや探るような、心を見透かすかのような瞳が真理を見つめる

「しろはぎ……かずはさんか……俺は神代真理。今日……というかついさつき島に着いたばかりなんだ。白羽木さんだっけ……」

「一春と呼べ」

有無を言わずと言った口調でそう言った。

「え？ああ。一春さん。ここってこの住所で間違いないか？」

真理は住所を読み上げてみた。

「ふむ？間違いないが？」

「よかった。ここに居る人にこれを、渡せて言われて……」

「む……」

一春に手紙を渡す。怪訝な顔をしながら一春は受け取る。それに目を通した瞬間

「……」

明らかに一春の表情が変わった。優雅な雰囲気が一気に崩れる。最初は驚き、今度は今にも泣きだしそうな悲痛な表情

そんな表情に真理は驚く。彼女がそんな表情をするなんて意外だった。

一体なんと書かれていたのだろう。

「お、おい大丈夫か？一春さん？」

「……………そうか…死んだのか……………」
俯く一春。

「一春さん……………」

「さんは要らぬよ。真理くん」

顔を上げた時、表情は戻っていた凜とした余裕のある表情だった。
先程な表情などおくびにも出さない。

「もしかしてジジ……………じゃない、叔父さんを知っているのか？」

「ああ……………良く、知っている……………全く神代の名で気付くべきだった。
……………まあ時が来たら話そう。しかし君が真理くんか……………成る程良く
似ている…目元は縁理様に、顔立ちは理子様そっくりだ」

「親父と母さんを知ってるのか！？」

神代縁理と神代理子。顔も知らない両親。

「……………ああ。だが私の口からは何も言えん」

「どうしてだ！」

それは真理にとって最も知りたい事の一つだった。思わず、語気が荒くなってしまふ。

「……………言えない理由がある……………すまない」

申し訳なさそうに頭を下げる一春。その姿に、真理も冷静になる。

「……………こっちも悪い。取り乱してしまつて……………」

「いや……………時が来れば話す時が来るだろう……………ところで……………」

「……………？」

「これから行くあてはあるのか？」

少し意地悪そうに一春は問い掛ける。

「……………あ。そういえば……………」

すっかり頭から抜けていた。今真理と深理は宿無しである事を

「全く……………その様子では何も考えていないな？この島で野宿は危険だぞ。昔ならばいざ知らず最近は妖魔も居る」

妖魔とはヒトを襲うアヤカシの事をそう呼ぶ。

「喰われても構わぬなら止めはせんよ」

「いや……流石にソレはやばいな……」

「ならば……我が家に来ないか？歓迎するぞ。暫く住んでも構わん」
「え……いいのか？」

一春のそんな提案。その申し出はかなり嬉しい。

「ああ。部屋は腐る程余っているからな……家賃などは気にする必要はない」

「本当にいいのか？」

「そちらが良いのなら問題ない」

「……じゃあ言葉に甘えさせてもらっよ。ありがとう」
「なに……気にするな」

「ああ本当にありがとう……なあ一春さん……」

「ん？何だ？」

「ちよつと気になったんだけど……その腰の刀って本物か？」

真理は一番気になっていた事を聞いてみた。

「む……まあ見れば解るだろう」

そう呟くと一春は腰の刀をすらりと抜いた。

「……！」

美しい……それは美しい刀だった。曇りの無い銀色に輝く刀身は鏡のようだ。反りはない芸術のような真つ直ぐな刀。淡い桜色の光に包まれていた。

真理は刀には詳しくはないが、その眼から見てもその刀は美しかった。妖刀にはヒトを魅了する魔性があるそうだが、ソレとはまた違う、純粹な美しさを感じさせる。

「どうだ？」

「……あ、ああ……何て言うか……」

見惚れていた真理は、一春の言葉で正気に戻る。

「綺麗だ………そんな綺麗なモノ見た事ない……」

「………そうか……やはりな……」

「………？何か言ったか？」

「いや………それにしてもそこまで誉めたのは君が初めてだよ」

そう言って一春は微笑む。

「そうか？俺は思った事を言っただけだけだな……………」
真理もまた、正直に言う。

「さて…………荷物はその鞆だけか？」

「…………あ！」

話しに夢中になって深理の事をすっかり忘れていた。

「しまった…………深理の事忘れてた……………」

「…………ミコト？」

「すっかり忘れてた…………悪い一春さんちょっと妹を探して来る！」

そう言って真理は走り出した。

その後ろ姿を見送る。

「ミコト…………初めて聞く名だな…………まあ不思議ではないか…………」

そう静かに呟く。

「……………神代真理か…君はどう思う？桜花？」

そう刀に呟く。すると、刀が変化を始めた。刀が光に包まれる。

徐々に形が変化していき、人型に変わっていく。

そして、変化が終わる頃には

「……………」

一人の涼し気な青い巫女服を纏った少女が立っていた。髪は一春と比べると短く、大きな瞳は無垢な印象を受ける。一春が美女ならば、少女は美少女といったところだ。

「……………」

「やはり君が視えていたようだよ…流石は、あの二人の息子と言っべきか」

「……………」

「…………しかし、こんな時に帰郷とは…………運命を感じられずには要られないいな…………ん？桜花？」

さつきから全く反応の無い桜花と呼ばれた少女。思わずその顔を覗き込む一春。

「なっ！」

「……真理さん……私の事綺麗って……あう……」

桜花の顔は朱に染まっていた。それはもう真っ赤に。まるで初恋を体感した乙女のように

「って！ちよつと待てえ　！何故だ！初めて会ったばかりだろう！」

「だって……男の人から綺麗って言われたの……初めてで……あう」

「……」

とても苦い顔をする一春。確かにこの島は男率は少ない。居るには居るがじいさん率が多い。事実年頃の男の子は少ないのだ。故に馴れていない訳で、初な訳で、そんな状態であんな綺麗だの言われれば確かに……

「はあ……存外惚れっぽいのだな……桜花」

「あう！？べ、別にそういう……訳じゃ……」

真っ赤になって言われても全くと言って言い程説得力はない。

「……本当……どうなることやら……」

「……はう……」

と言いつつ一春の顔は自然と緩んでいた。

「さて……私は歓迎会の準備をして置こう……桜花は二人を迎えてくれ」

「……は、はい！」

「もしかしすると……神樹の所に居るかもしれんな」

「はい！行ってきます」

そう言って走り出す桜花。それを見送り一春は思う。

（時が来れば……か）

そんな日が来ないならそれでいい……一春はそんな願いを覚えた

……
叶わぬ願いと知って……

第二話「神樹くさくら」

第二話「散らぬ桜」

「……………」

石段を降りながら、真理は景色を眺める。

（やっぱ……………思い出せないか……………）

神代真理は、後天的な記憶障害であると医師から、診断された事がある。いくら数年程度といえど僅かながら記憶は残る筈なのだ。真理の記憶にはこの島に関する記憶がすっぱりと抜け落ちている。忘れたのはソレだけではない。深理の事すら言われるまで覚えていなかった。

（……………騒がしい奴だけど…俺はあいつにどれだけ救われてるんだろうな……………）

深理の笑顔を思いだしながら、石段を歩み進める。石段が終わる。緑に包まれた広場があった。神秘的な場所だった。

「……………ん？」

ひらりと……………花びらが舞っていた。

「……………！」

有り得ない……………だがとても幻想的な景色。桜の花びらが舞っていた。夏の始まりである6月では決して有り得ない光景。

「……………」

巨大な桜の樹が満開の花を咲かせていた。

有り得ない光景な筈なのに……………何故だが酷く懐かしい。

「……………ぐっ！」

思い出そうとすると、

頭が割れそうになる。

胸が張り裂けそうになりそうになる。

俺は……この樹……を見た事がある！？

「だ、大丈夫ですか！？」

「……………っ！？」

再び声をかけられ正気に戻る。今のは一体？

少女が心配そうに、真理を伺っていた。

「悪い……大丈夫だ」

「……………よかった……」

ほっとしたようにそう呟く少女。その少女は一春とは違う青い巫女服を纏っていた。

「えっと……君は？」

「あああ、あの私、その……か、白羽木……桜花です……」

何故か真っ赤になって、慌てたように自己紹介をする桜花と言う少女。

「白羽木桜花か……よろしく。俺は」

「知ってます！神代真理さんですよねっ」

何故か勢いよく答える桜花。若干驚きながら、

「あ、ああ……そうだけど……あ、そうか白羽木って一春の姉妹なのか……」

「は、はい。お姉ちゃんに聞いたんです！」

何故彼女はテンパってるのだろうと真理は疑問付が浮かぶ。

「……もしかして、迎えに来てくれたのか？だったら悪いな、わざわざ」

「い、いえ！だ、大丈夫です」

「……………でも、まだ妹が……」

そう真理が言った直後、

「マコトお……！！」

聞き覚えの有りすぎる声が辺りに響いた。そしてもうスピードでやってくる人影。

あ、何だかデジャブ。

「マコト……！！」

「ぐえ!？」

と気付いた時は、既に遅く深理のジャンピングヘッドバットが鮮やかに、真理の水月（鳩尾）に決まっていた。更に受け身も取れず、背中を強打してしまった。

「~~~~~!!」

「わっ。大丈夫ですか!？」

妹に押し倒されると言うシュールな光景が広がっていた。更に、追撃のように深理の頭がぐりぐりと食い込む。

「マコトどこ行ってたのお？ミコトいっぱい探したんだよ？」

「~~~~~!!」

探してたのはこっちだよ!

いや……それより……ど、どいて

吐き気を抑えるのに必死で反論が出来ない。

ああ………意識が……

「マコト?」

「あ、あの……そろそろどいてあげた方が……真理さん何だか青く……」

……

「わわ!マコト!?大丈夫!?」

大丈夫!大丈夫!大丈夫!?

と頭の中で反響する深理の声を最後に真理は意識を失った。

「……………ん?」

「あ………起きました?」

「ああ………嫌な夢を見た。妹に鳩尾を貫かれ、意識を失う夢だ。うん悪夢だった」

「……………それは現実です」

「……………」

リアル過ぎる夢だとは思ったけどな……

そつえばと……この状況は一体?やけに柔らかい……枕?

「……大丈夫ですか？」

「……」

眼を開ける。見えたのは、姉には負けるが豊満な胸で、顔は少しが見えない。アンダー視点。つまり膝の上。

「……えっと……これって？」

「……って！うお！ひざ枕！？」

思わず身を起こす。

「あう！？何ですか！？」

「あ、いや……その……」

「あ……も、もしかして嫌でしたか？」

「い、嫌って言うか……寧ろ嬉しいんが……じゃなくて
恥ずかしいとか……だって初対面だぜ？」

そう言った事を言いたかったが、言葉には成らない

「………？」

本当に不思議そうに首を傾げる桜花。彼女にとっては、倒れた人を放って置けないという純粋な気持ちからの行動なのだろう。そう思うと自分が恥ずかしくなる。

「まあ……いいか……ありがとな……」

真理はとりあえず、桜花にお礼をした。

「い、いえ……お安いご用です……」

「む……そういや深理は？」

諸悪の根源というか……騒動の大元を探す。

「……深理ちゃんならそこに……」

桜花が指を指した方向に、

「………」

木陰に隠れているつもりなのか……もろ見えだが、心配そうにこつちを伺っていた。怒られるのを恐れてるのだろうか。

怒る気はとつくに無くなっている。

「……はあ……いいから出てこいよ深理。怒ってないから」

「………」

とぼとぼと歩いてくる深理。

「……………」

「深理ちゃん……真理さんに言うあるでしょ？」

「……ごめんなさいマコト……」

「……………」

正直驚いた。まともに深理が謝るのは珍しい事だった。

「いいって……もう気にしてない」

「ほ、ホントに？」

「ああ……それに、その顔は似合わない。いつも通り笑って開き直れよ」

「……………」

そう言われると深理は驚き、そして、

「うん！やっぱりマコト大好きっ！！」

再び、真理に抱き着く深理。

「うわっ！引っ付くなって！」

「ふふっ」

そんな二人の様子を見て、桜花がくすりと笑った。

「仲……いいんですね」

「ん……まあ……悪くはないが……」

「うん！ミコトはマコトが大好きだもんっ」

そう兄妹が言くと、桜花は微笑む。

「……臨神島へようこそ……いえ……お帰りなさい真理さん深理さん……」

「……」

「……………」

「うん！」

真理はその微笑み異様な懐かしさを感じながら、そう返した

「ところで……この樹は一体？」

夏に咲く筈の無い桜の樹。満開の桜。

「……私達は神樹と呼んでいます……」

「神樹……？」

「はい…遙か昔から咲いているそうです…この樹は一年中咲いているんです。私達は、この樹を奉っているんです」

「成る程……」

「……………」

「……深理？」

深理はまるで心が抜けたかのように、その桜の神樹を見つめていた。尋常ではないその様子に、

「おい！深理！？」

真理は強く呼び掛ける。

「……………っ！」

その呼び掛けに強く反応する深理。

「お、おい！？深理？どうしたんだよ！？」

「！……な、なんでもないよ！ミコトは大丈夫だよ！」

明らかに無理をしている様子の深理。

「…深理！…本当に大丈夫なのか！？」

「だ、大丈夫だよ！」

「……………」

真理は納得しない。

だが有無を言わせないその深理に引き下がるしかなかった。

「あの……本当に大丈夫ですか？深理ちゃん？凄く辛そうでしたよ？」

「……ホントに大丈夫だよ！ミコトはいつも元気いっぱいだよ！」

「……………」

その深理の笑顔に真理は追求しなかった。いや出来なかった。

「……本当にでかいな」

「うんうん！旅館みたいだねっ！」

「いえ……そんな事は……」

案内された白羽木の家は、深理の言うように和風の旅館のような屋敷だった。

「お……来たようだな」

玄関からやってきたのは、洋服姿の一春だった。

「む……何だその顔は？ 似合わないとも言いたげだな」

「あ、いや……そんな事は……」

寧ろ似合あっている。和服のイメージがあったが、こちらの私服も似合う。更にその優雅な雰囲気は失われてはいない。

「おつ。桜花も帰ったか……お帰り……」

「はい。ただいまですお姉ちゃん」

「ふむ……そちの子は？」

「ああ……妹の深理だ。ほら、お前も挨拶しろって」

そう真理は言ったが、深理は真理の後に隠れたままだ。

「……………」

「深理？」

まるで、何かに怯えているようだった。その深理の様子を見て一春は、

「いや……………まさか」

眉を寄せ険しい表情をした。

（……………何だ？）

「……………済まない……何でもない……どうやら深理くんには嫌われたようだな……………」

「……………深理」

「……………」

「あの……………そろそろ日が暮れますし、だからえっと……」

「ああ……………ほら真理くん、深理くん中へ……桜花、家の中を案内してやってくれ。私は夕餉の準備をしておく」

「は、はい」

「では、また後でな」

そう一春は言い残し家の中へと入っていった。

「……では私についてきて下さい…」

「……ああ」

「…うん」

「……本当に旅館みたいだな……」

「はい……元々お客を招く為に作られたそうですから…」

木造の廊下を歩く、庭園はよく手入れされ様々な植物が綺麗に咲いている。

「……凄いなっ！こーゆうのはオウカが手入れしてるの？」

「いえ……私とお姉ちゃん……二人共忙しい時は業者の方を呼んでいます」

「……凄いな」

「あつ。ここです」

そう言つて案内された部屋は、本当に旅館のようなソレだった。

二、三人程は泊まれそう畳造り。クローゼットや、箆筥に本棚。更に机といった家具まで完璧だ。

「他に必要な物があつたらいつでも言つて下さい。あつテレビとか要りますか？」

「……………」

「あつ。ミコトは見るかもー」

「はい……では用意しておきますね…それとエアコンは効き過ぎないようにして下さいね。風邪をひいてはいけませんから」

「な、なあ」

「はい？」

「いいのか？こんな良い所に居候になつてしまつて…」

そう真理が言つと桜花は微笑み。

「はいっ。大丈夫です。ここは行く当てない方はよくここに訪れますから慣れてます」

「……………ありがとう」

そう言って真理は頭を下げる。

「はいっ。どう致しまして。私は、お姉ちゃんの手伝いをしてきます。用意が終わったら呼びに来ます。ゆっくり休んで下さい。では」
そう言い桜花は去って行った。

「……………」

「マコト、疲れた？」

「ああ……………この島…何か暖かいな……………」

「うん！そうだね」

不思議な島だ。散らない桜の樹。白羽木一春と桜花。

「深理……………」

「んっ？なあにマコト？」

「いや……………何でもない」

「？変なマコト」

深理は何か隠している。いつか話してくれるのだろうか…………

そう思いながら、深理の顔を見つめた。

そして…………

（俺は……………思い出せるのだろうか……………この島の事……………親父と母さん……………）

そう真理は思った。

桜は咲き続ける

散らない桜は

歌うように

終らない悲しみを紛らわすように

永遠に咲き続ける

永遠に……………

第三話「月夜、始まりの宴」

第三話「月夜、始まりの宴」

日が傾き始めていた。外はうっすらと闇を生み出し始める。

とりあえず真理と深理は、荷物の整理をしていた。これから長い間住む事になるのだ。準備はしておいた方がいいだろう。

「ま、衣服はこの箆笥にいれとくか……と言つか良いのか？ 同室で……」

深理だって一応女の子だ。兄とはいえ男と一緒にするのは良いのだろ
うかと真理は思う。

「うん！ミコトはマコトと一緒になら何処でもいいよ！」

「恥ずかしい台詞を平然と言うなよ……」

深理の方はあまり気にしていないようだ。

「……ならいいか……」

再び荷物の整理を始める。

$$\vdots$$

見つけたのは、高校の教科書。高校も中退したようなもので、仲のいい友達も居た。だが真理は、この島を選んだ。その事自体に後悔は無いが、未練が無いと言えば確かに嘘になる。

⌋
⋮
⌋

とりあえず、本棚に仕舞う。色々考えても仕方ない。

後靴に入っていたのは、漫画、雑誌、歯磨きセット。

「……おっ」

奥の方には段ボールのような物が入っていた。

「ジジイが入れたのか……何だろう」

開けてみると、……エロ本がみっちり詰まっていた。

「ぶつ！？」

「ん？どうしたの？マコト？」

「いやいやいや！何でもない何でもない！」

慌てて隠しながら、中身を見る。妹モノのえげつない奴が何故か大量にあった。他人に見られたら間違いなく正気を疑われるか、近親相姦呼ばわりだろう。もちろん真理の持ち物ではない。だが、ご丁寧に真理の私物のエロ本もあった。

「クソジジイ！嫌がらせかぁー！？」

「マコトさつきからどうしたの？様子おかしいよ？」

「い、いや！何でもな！？無いからな！？」

覗き込まれそうになったので必死に死守。とりあえず段ボールを閉める。更にガムテープでがんじがらめにする。これは後でジジイの写真と共に焼却しよう

さらばジジイ……思い出と共に消えてくれ。

「……………はぁ……………」

結局あのジジイは、俺を精神的に殺したかったのかと真理は、疑問に思う。

（尊敬は……してたんだよね？）

にやりとジジイが嫌な笑みが脳裏に浮かんできた為、何だかそれすらも疑問になってきた真理であった。

「ミコト、お腹空いたなぁ」

「そっつい遅いな……」

部屋の整理が終わる頃には、窓から見る景色は、もう黒く染まっていた。

そろそろ腹の虫が鳴く頃だ。深理の我慢がきれる前に、

「ちょっと聞いてくるか……」

「ミコトも行くー！」

「駄目だ……入れ違いになったら困る」

「む……わかったよ……」

「んじゃ行ってくる」

部屋を出ると。だだっ広い廊下が広がっている。

「とりあえず適当に歩けば会えるだろ」

「……………迷った」

白羽木邸はかなり広く、現在地が把握出来なくなっていた。もはや迷路のようだ。地図が欲しい。

「畜生……………遭難でもした気分だ」

その上腹も減った。自分もそろそろ限界なので深理は既に空腹で野獣と化してるのではと本気で思う。

少し歩を速く進める。曲がり角に差し掛かった瞬間

「うわっ!?!」

「きゃ!?!」

誰かにぶつかった。ぶつかり尻餅をついたのは桜花だった。

「つと。悪い!」

思わず、手を差し延べる真理。

「はい……………ありがとうございま……………」

その手をとり起き上がる桜花。そして途中で気付く。バッチリ手を繋いでいる事に、

「あ!……………!あうあうー!?!」

真っ赤になつてそんな奇妙な声をあげ始めた。

「な、何だ?俺何かしたか?」

「あううゝ真理さんと手、手、手を……………」

手を繋いだと言うかそれだけで舞い上がる初なと言うか、何と云うか分からない桜花に、突然あうあう言い出した桜花に困惑するだけの真理。

收拾がつかなくなりそうなので。閑話休題

「えーと、落ち着いたか?」

「は、はい……………取り乱してすいません……………」

ようやく落ち着いた桜花と真理は二人で無言で歩いていた。

(…あう。みつともない所を見せてしまいました…変な子とか思われてないでしょうか)

そう桜花は思うが、初対面の時既に変わった子だなと思われているので手遅れな訳だが、

(あう……姉は立派なのに妹は駄目な子とか…思われてないでしょうか……あうゝそんな事になったら……あうあうあうあうゝ！)

桜花が更に後ろ向きな妄想をする。脳内妄想はどんどん後ろ向きな方向へ突っ走っていく。

(どうしよう……私なんてやっぱり…)

「なあ……」

「はひい！なんれすか！？」

ネガティブ螺旋が佳境に突入した時に、真理に急に声をかけられたせいで素っ頓狂な声をあげてしまう桜花。

真理としては重苦しい沈黙に耐えられなかったただけだが。

若干驚きながら、

「……ホントに広いよなこの家…迷ってたよ、桜花に会えて助かったよ」

そう呟いた。旅館のような屋敷だ。

「えっ。は、はい！そうですね……珠に私も迷っちゃうんですよ…

……」

「自分の家なのか？」

「はい……広過ぎますから」

いいのかソレとは思ったが口にはしなかった。

「……桜花は、一春さんとは二人で暮らしなのか？」

真理は気になっていた事を聞いてみた。

「はい……両親は二人共死別していますから……」

桜花の表情は僅かに陰る。失言だったかと真理は思う。一春が自分の事を神主と言った時から予想はついていた筈なのに。

「そっ…なのか……悪いな。辛い事聞いて……」

「い、いえ！大丈夫です………一春お姉ちゃんが居ますから、淋

しくなんてないんです。それに…」

「それに？」

そう聞き返した真理に桜花は笑顔で応える。心底嬉しそうな顔だった。

「家族が二人……増えましたから」

「……！」

一瞬、驚き真理は言われた言葉を理解する。真理は、

「……ああ。ありがとな」

真理は微笑みながらそう返した。

「………」

すると桜花は驚いたように、何か信じられないものを見たと言う表情をした。

「えっと……どうした？」

「いえ……真理さんの笑顔初めて見ましたから」

「そうか？」

「はい……苦笑いとかそう言うのはありましたけど……何と云うか……その……真理さんもそんな風に笑うんですね」

優しく、透き通るような笑顔。見る者を安心させるような微笑みだった。

「……俺ってそんな無愛想か？」

「はい！」

即答だった。なんか少しだけショックだった。

「……まあ……よく言われるよ……昔から愛想がないのかな」

マコトはホントに無表情だよねえ……とかよく深理から言われる。顔にあまり感情が出ないのかも知れない。いや……それ以前に、感情をつまく表せなくなっている。両親の事故の影響なのだろうか……

「……だから……最初は恐い人かなって思いました……でも本当は優しい人で……」

「……買い被り過ぎだ。……俺はそこまで優しくない」

「………そんな事はないです。深理ちゃんもとっても懐いてますし

……」

真理にはどうしてあんなに深理が懐いているのか分からない。記憶が……ないのだから。

「……………俺は」

「マコトお……!!」

何かを言いかけた真理を遮るように、深理の叫びが響いた。

「まさか……………」

嫌な予感がある。案の定向こうから凄いスピードでこちらに迫る深理。

時間がゆっくりに感じる。そうか交通事故とかでダンプカー突っ込んで来た時の感覚と同じようなものか。

「何度も同じパターンが通用するか!!」

すんでの所で深理の飛翔頭突きを腕でガードする。

勝った！勝利を確信する真理。だが、

「……………!??」

ちーん……

バラエティーでよく流れる効果音が響く。深理を受け止めるまではよかった。だが、深理の膝が勢いよく真理の大事な部分に

「§ § §……………!??」

もはや言葉とは思えない声が真理から発生する。

「わわ〜マコトが宇宙人になっちゃった」

「だ、大丈夫ですか？」

「……………!」

鈍い痛みに悶える真理。男にしか分からない地獄の苦しみだった。

「深理お……!!」

「ひゃん！だ、だってえ〜迷ってたんだもん！怖かったんだからあゝ!」

「部屋で待つてろって言っただろ！」

「お腹が限界だったんだもん！」

「いちいち飛び込んでくるな！」

二人共空腹の為、気が立っているようで口喧嘩が始まる。
桜花はあわあわと慌てるだけだった。

「……何を騒いでいるんだ？お前達は」
突然の第三者の声に三人が振り向く。呆れたような表情をした一春が立っていた。

「お姉ちゃん」

「全く……夕餉なら出来たぞ。ついてこい」

「……ようやく飯か……」

「わあい！ご飯ご飯！」

一春が案内した部屋は畳造りの広い間だった。窓からは中庭が覗ける。

入った瞬間とても良い匂いが。

「……美味そう」

「スゴイ豪華だねっ」

真理は驚き、深理は眼をきらきらさせている。長いテーブルに載せられた料理は豪華絢爛だった。尾頭付き鯛の刺身に、芋の煮物、天麩羅といった和食に、ハンバーグ、エビフライ、ポテトサラダなどといった洋食まで用意されていた。白いご飯とお握りさらに稲荷寿司もあった。

「食い切れるかな……？」

たじろぐ真理に対し、深理は今にども飛びつかんばかりだ。

「これ全部食べていいのっ？」

「遠慮は要らぬよ」

「それじゃあ食べましょうか」

「……いただきます！」

真理はとりあえず和食から手をつける。野菜の天麩羅をタレにつけ一口。

「……うお」

旨い。さっくりと揚げられていて確かな歯ごたえ。野菜の甘味が

特製のタレと共にじわつと広がる。

「どうだ？」

「美味しいな……本当に料亭に来たみたいだ」

「それは誉め過ぎではないか？」

一春も苦笑しつつも自分の作った料理を食べる。

「み、深理ちゃんいつぱい有りますから落ち着いて食べて下さい……」
「ふぁへっおいひいんむぐっ（だって美味しいんだもん）」

深理の近くの料理が凄い勢いで消費されていく。

「……」

やれやれと思いながら、洋食のハンバーグに手をつける。すると

桜花が、

「……あっ」

「……ん。どうした桜花？」

「いえ……何でも……」

疑問に思いつつも口に運ぶ。

「おっ」

とんでもなく美味しい訳ではないけど、印象に残る味。それは家庭の優しい味だった。

「どう……ですか？」

少し躊躇いがちに感想を聞く桜花。

「ああ。凄く美味しいよ」

そう真理が答えると、桜花は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「よかった……」

「もしかしてこのハンバーグ桜花が作ったのか？」

「はい……私あんまり料理得意じゃなくて……その、ハンバーグだけは上手に作れるんです。ですから喜んで貰えて嬉しいです」

一生懸命作ったのだらう。ハンバーグからソレを感じる。

「そうなのか。でも本当に美味しいよ」

「当然だ」

二人の会話に一春が入ってくる。

「なにせ…愛情がたっぷり入っているからな」

「あ、あう！お、お姉ちゃん！」

ニヤニヤと意地悪そうな笑みを浮かべる一春と、真っ赤になる桜花と何の事か分らず首を傾げる真理。

「いただき！」

「あつ俺の天麩羅！」

「早いもの勝ちだよっ」

「くっ……後一つだったのに……」

「ま、まあ真理さん他にも有りますから」

深理はもちろん桜花と一春も結構な勢いで夕食を消費していく。その勢いに真理は、若干驚きながら自分も平均的な速さで食べる。なんだかんだ言って大量の夕食は米粒一つ残らなかった。

「……食った……」

「ごちそうさま」流石にミコトもこれ以上食べれないよ」

流石に満腹で動けない。別に牛になってもいいから寝たい気分だった。深理も横になっていた。

「お粗末様でした」

「つと片付け手伝うよ」

皿を片付け始めた一春と桜花を見て真理も慌てて立ち上がる。食べるだけ食べて片付けをしないのだ流石に悪いと思ったのだ。

「いえ……それよりも……」

「深理くんを何とかしてくれ」

二人はそう言っ、深理を指差す。深理を見ると、

「すう……すう……ふにゅ」

小さく寝息を立てていた。

「あつ。こら」

真理はこんな所で寝るなと起こそうとするが、

「まあまあ真理さん……深理ちゃんも疲れてるんですよ」

「起こすのは酷であろう…片付けは良いから、部屋で寝かせてやると良い」

そう言つて、桜花と一春が止めた。確かに、気持ち良さそうな顔をして眠っているのを起こすのは流石に気が引けた。

「仕方ないな」

「ああ……ちなみに迷わぬように忠告するが君達の部屋は、この部屋を右に出て突き当たりに左曲がった先の2番目の部屋だぞ？」

「……………」

意外に、近かった。

「分かった。ありがとう」

一春にお礼を言い、深理をおぶさる。少し軽かった。

部屋から出て言われた通りに進む。

「おっ……………」

あつという間に着いてしまった。とりあえず真理は、闇雲にここを探索するのはやめようと思った。

「……………よっ」

一度深理を畳に寝かせる。押し入れを開き、布団を取り出し敷く。

「……………ふう」

深理を布団に寝かせ直し、薄い掛け布団を深理に掛け一息つく。

片付けを手伝いに行こうかと思つたが、何となく深理を一人にしておくのはまずい気がした。

「しばらく、待っているか…」

真理は椅子に腰掛け、ぼんやりしておく事にした。

「……………ヒトとアヤカシも変わらない。心の在りようで、聖とも邪にもなる……………か」

ジジイに教えられた言葉を思い出す。

『このセカイは矛盾してある。オヌシの力は正しく使うがいい』

「……………俺に、何を教えたかつたんだアンタは？」

もつ会える事もない叔父の顔を思い出し、そう呟いた。

本来有り得ない矛盾を孕んだ世界。散ることのない桜は何を伝えたいのか……

第四話「夜〜夜桜〜」

第四話「夜〜夜桜〜」

〜ヒトは過ちを犯さないと自分の考えを変えられない。その過ちは取り返し等つかないのにも関わらず〜

「夜桜……風情があつていいモノだ」

神樹の前に佇む人影。黒依の和服を纏い、顔には狐の面……その為表情は窺えない。

だがその雰囲気は悲しみや喜び様々な感情を混ぜて凝縮したような声だ。

「さて……始めよう……全てを」

そう呟くと男は霊力を神樹に向けて発散した。

「む！」

台所で食器の片付けをしていた一春は只来ぬ気配を感じとった。その方向は神樹だった。

「何だ……？ この感じ人間？ いやアヤカシか？」

どちらとも判断がつかない異様な気配……なんにせよこの地を護る守護者としては放つては置けない。

「お姉ちゃん？ どうかしましたか？」

気を引き締めた巫女の表情を浮かべる一春に桜花もまた真剣な眼

差しを向ける。

「桜花。神樹を害する者の気配を感じた。すまないが後を頼む」

「それなら私も……」

「真理君や深理君の事もある。君は残れ」

「でも……！」

「なに……案ずるな君が居なくとも上手くやるさ」

「……はい」

渋りながらも了承する桜花。一春の言う通りで、真理と深理の事も心配だった。妖魔の数が増えている事も有り、魔を引き寄せやすいこの屋敷に二人を置いていく事は賢明ではなかった。

「では……な」

「はい。気をつけて……」

次の瞬間には一春は疾風のように駆け出していた。

「なん……だ？」

部屋で待機していた真理は奇妙な異変を感じていた。

「……………」

胸がざわつく。頭が痛い。

「……呼んでる……」

誰かが……誰が……俺を……

頭に激痛が走る。

「……………」

立ち上がり、部屋を出る。何かに導かれるように歩き出した。

狐面の男は神樹の前で佇んでいた。腰に携えられた二本の太刀。その一本を抜く。

夜の闇よりも黒い刀。漆黒と言うのも生温いこの世の憎悪を凝縮したような刀だった。

「無粋だな」

誰かに話し掛けるように振り向く男。その先には、

「……そちらこそ。随分な格好だな。そのような死装束では風情もあつたモノでは無い。貴様……何者だ？」

刀を構えた一春が居た。夜の闇にも輝くソレは名刀である事を表していた。

「……対話するのに刀等無粋とは思わないか？」

「名乗らぬ者に礼儀等要らぬだろう」

余裕のある態度を取りながら、一春は目の前の男に関して考える。
（妖気は感じられない……ヒトか？　だが……なんだこの異質な気配……）

恐怖感と言ったものでも無く、嫌悪感等では無い。得体の知れない感覚。それが目の前の男から発つせられていた。

「…………ふっ」

「何がおかしい？」

表情は面で隠され分らないが男は明らかに笑った。さも可笑しそくに。

「これは失礼だった。私は心里しんりと言う……白羽木一春よ」

「！　見知らぬ男が私の名を知っているとは……私も有名人となつたモノだな」

正体を知られている！？　一春は内心の動揺を悟らせない為再び軽口を叩く。

「稚拙な挑発……必死だな……一春さん」

「っ!？」

一春が驚いたのは、自分がさん付けで呼ばれた事でも無く、挑発に熱くなつた訳でも無い。

気が付くと、目の前に心里と名乗つた男が迫っていた。

(縮地……だと!?)

心里は腰に構えた刀を斜めに振るう。居合いからの一撃。

「くっ!」

それをぎりぎりで躲し、後ろに跳ぶ。

(……………仙術にでも精通しているのか?)

「正確には縮地では無い」

「!？」

一春の心情を悟つたように語る心里。

「仙術で確かに縮地法と言うモノはある……だが馬鹿な事を。人間にそんな事出来る訳が無いだろう」

一春の視界から心里が消える。

(……………何処だ?)

「私のはただの足捌き。踏み込みの疾いただの足捌きを数百年と修練すれば……このくらいの技術等たやすい」

軽く。ただ世間話をするような軽くそんな事を言う心里に一春は動揺を隠せない。

「……馬鹿な。それこそ人間では……」

「……何を言う。能力でヒトは他の種族に比べ圧倒的に脆弱だ。寿命に、体格、能力、身体能力。全てにおいて脆弱だ。しかし、そんなヒトが生き残れて来た理由は三つ。と言つても私が考えているだけだかな。ヒトは知恵。悪知恵と揶揄やゆされるが……それでも知恵に変わるまい。二つ目は数だ。数の暴力は何よりも強い。

そして三つ目……」

「……………!」

再び迫る男。なんとか刀で受け止める。

「それは、他を出し抜く努力だよ」

「……………あれ？」

桜花が真理と深理の様子を見に行こうと廊下を歩いていると、

「真……………理さん？」

中庭へふらふらと歩く真理の姿を捉えた。

「！？」

唐突に悪寒が走る。同時に感じる肌を刺す気配。

（黒い……………妖気！？）

真理の前方に黒いモノが現れた。

（妖魔……………！！ どうして結界が張ってある筈なのに！！）

しかし、そんな事を考えている暇など無い。

「真理さん！！」

「……！」

自分の呼ぶ声で真理は正気に戻る。

「……！？」

そして再び驚く。目の前に迫る異形のモノ。触手の蠢くソレは見
る者に嫌悪感を与える

（……なんだ！？ コイツ！）

「真理さん！ 下がってください！！」

「……！」

その声に一步下がる。その直後、

「はぁ！！」

「桜花！？」

桜花が妖魔に斬りかかった。右腕を刃に変えて。桜花はアヤカシ
だったのか……いやそんな事はどうでもいい！

「桜花！」

「真理さんは早く安全な所へ！」

「桜花は？」

「私のコトはいいですからっ！」

戦況は素人の目から見ても劣勢。妖魔の触手をなんとか弾くのが
精一杯のようだった。

だが、だからと言って加勢なんて出来ない。足を引っ張るだけだ
と火を見るより明らか。

（だからって逃げれるかよ！）

女の子を見捨てて逃げれる筈は無かった。

（俺は……また、無力なのか！？）

（また……？ 俺は昔にもこんなコトが……？）

真理に浮かんだ疑問。しかしそんな事を考える状況ではなかった。

「……くっ！」

状況が動いた。それも悪い方へと。

桜花の体勢が崩される。そこを逃す妖魔では無い。複数の触手が桜花に殺到する。

桜花は躲せない！ あの状態で躲せる筈が無い。

「桜花！！」

真理は理性が止めるより早く駆け出していた。

「……………あ」

迫る触手の雨。今全てを躲せる筈が無い。

（命に代えても真理さん達は守る！）

致命傷を負っても倒せればそれでいい。刃に変えた右腕を構える。
どん。

「えっ？」

予想外の衝撃。受け身も取れずに倒れる。

慌てて身を起こす桜花。そして信じられ無い光景を目にしてみま
う。

今まで自分が立っていた所には。

「え…………？」

身体に至る所を触手に貫かれた真理が立っていた。

「……………がつ」

触手は元の場所へと戻る。触手が抜けた真理の身体が崩れ落ちる。紅い液体が辺りに広がり、桜花を濡らした。

「ま……………こと……………さん？」

何が起こったのか。簡単な事で単純な事だ。だが頭が理解出来ない。しようとしなない。認めたく無い。

「いやああああああああー！！！！？」

真理が。守るべき人が。自らを庇ったのだと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6993m/>

桜色の彼方

2011年3月22日16時10分発行